

～コミュニティのウチとソトをつなぐ仕組みづくり～

平成30年地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅡ】採択課題

課題名： 中山間地域における、コミュニティ内部・外部の資源を活用した地域の生活支援ニーズ・シーズのマッチングシステムの構築
 研究代表者：社会福祉学部 准教授 菅野道生
 課題提案者：北股地区振興会 会長 阿部睦雄
 研究メンバー：庄司知恵子（社会福祉学部）、渡邊圭（東北福祉大学感性福祉研究所）
 川原直也（総合政策研究科博士前期課程）
 技術キーワード：人口減少 高齢化 地域コミュニティ 外部人材

▼研究の概要（背景・目標）

本研究では、内部資源に乏しい中山間地域において、外部資源も活かした「ニーズ・シーズマッチングシステム」の構築を目指した。

システム構築のプロセスと成果・課題の分析を通じて、過疎と高齢化の進展する中山間地域において外部の人的資源を活かした地域課題解決のモデルを提示することが研究の目的である。

▼研究の内容（方法・経過）

岩手県奥州市衣川の北股地区において、大学と地元住民組織（地区振興会）との協働で、地区内にボランティアセンターを設立し（図1）、地区外からの宿泊型ボランティアワークキャンプ（以下、WC）を受け入れるプログラムを2か年にわたって実施した。そのプロセスおよび、そこでマッチングしたシーズ・ニーズのデータ分析を通じて、中山間地域における持続可能かつ他地域にも適用可能な、生活課題解決システムのモデルを提示することを目指した。

▼研究の成果（結論・考察）

2か年の実践を通じて、①実際に住民組織によるニーズ・シーズマッチングシステムが地域に実装されたこと、②システムの運用を通じて、地域内外に課題解決のための人的資源とつながりが豊富化したこと、等の成果が確認された。一方で、対応したニーズについては、地域課題（集落単位の共同作業や行事等の人で不足）に関わるニーズに比べ、個別支援ニーズ（高齢者宅の片づけの手伝いや雪かき等）が寄せられにくいという特徴がみられた。

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

本研究では、外部シーズを学生中心としたため、土日や長期休暇中の宿泊型WCという形となった。この形は定期的な地域支援ニーズへの対応にはある程度マッチするが、随時発生する個人の生活支援ニーズに対してはミスマッチが生じたことが考えられる。

また、プログラムに対する地域内部の住民の参加を拡げていくことは、今後にもけた大きな課題である。現時点では、「現地コーディネーター」として参加する地元住民のボランティアのうち、64歳以下の参加者は2名であり、特にこれまで地域活動に参加してこなかった若い世代の参加を得ていくことが必要となっている。学生ボランティアとの交流や地元の若い世代のつながりを活かした取組を行っていくことがポイントとなる。

本研究の成果を踏まえ、今後は外部シーズを多様化する（他地域の元気高齢者や企業の社員ボランティア等のコーディネート）こと、恒久的な財源（国の中山間地域等直接支払制度等）とのドッキングなどによって、持続可能かつ普遍的なモデル構築を目指すこととしたい。

図1 プロジェクト概念図

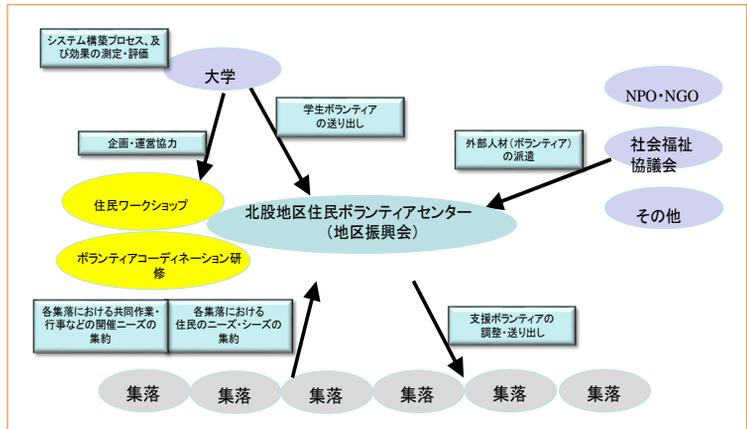


表1 ニーズ・シーズの集計(2か年)

ニーズ(件)	個人	地域	計
2018	25	7	32
2019	23	16	39
計	48	23	71
シーズ(人)	地域住民	学生等	計
2018	14	70	84
2019	26	87	113
計	40	157	197

